復興から成長 改修重ね

富山電気ビル

アーチ天井 空襲で焼失

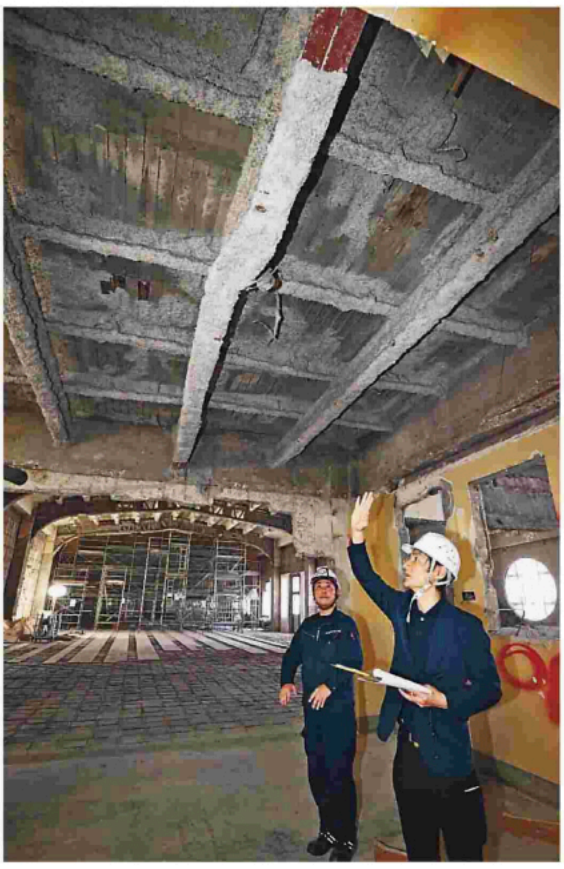


色が異なる大ホールの天井。GHQの接収時の改修では薄緑色（手前）、接収解除後の改修ではベージュ色（中央）が塗られた＝富山電気ビル

見つかったのは大空襲の痕跡だけではなかった。富山電気ビル（富山市桜橋通り）では連合国軍総司令部（GHQ）による接収を経て、戦後の復興から高度成長期へと向かう中で重ねられた改修の跡も確認。5日に報道陣を案内した関係者は「単なる歴史的建造物ではなく、今後も県民に利用される建物として残していきたい」と話した。【本記1面】

「今後も使われる建物に」

戦後80年



富山大空襲の火災による熱で変形した鉄骨

1936年の完成時、富山電気ビル5階大ホールには格子状の装飾を施した緩やかなアーチ型の天井が設置されていた。富山大空襲でこの天井が焼失し、鉄骨やコンクリートがむき出しの状態になった。

戦後の46年にGHQによる接収が決まり、急きょ復旧工事を実施。しかし、予算、資材の不足で天井の装飾は再建されず、コンクリートに直接、薄緑色の塗装を施すなどの簡易的な処置にとどまった。接収解除後の54年に本格的な復旧工事が行われ、天井部は一部を除いてベージュ色に塗り直された。

83年の全面改修により天井が再建されたため、戦後の痕跡は長く人目に触れない状態になっていたという。今回進められた耐震改修工事により当時のものとみられる薄緑色やベージュ色の塗装が再び姿を現した。

大ホールは11月までに耐震改修工事を終え、12月の営業再開を目指す。再開後は内部が再び見られなくなるため、同社では写真などでの記録を検討している。

工事の設計を担当する三四五建築研究所（富山市新桜町）の濱田文仁一級建築士は「保存にとどまらず地域経済と深く結びつき、今も活用されており、これからも歴史を刻む。全国的にも非常に珍しく貴重な事例」と語った。（新井翔大）

webunプラスでは大ホールや廊下の360度画像が見られます。